

例 奥羽大学歯学会事後抄録用紙

演題名	パノラマX線写真を用いた上顎洞底と歯槽骨高径の成長変化に関する横断的研究
所属	奥羽大・歯・成長発育歯，放射線診断 ¹
演者	奥羽太郎，郡山利彦，三角弄子，阿武隈 久 ¹

【目的】上顎洞の成長は，上顎骨の成長のみならず歯の萌出に関連が深いとされている。そこで上顎臼歯部に先天性欠如歯（以下，先欠）を有する症例の上顎洞底と先欠部における歯槽骨の成長変化について検討した。

【対象および資料】対象には，奥羽大学歯学部附属病院矯正歯科，もしくは小児歯科に来院した上顎臼歯部に先欠を有する患者で6-10歳の混合歯列期患者8名，14歳以上の永久歯列期患者6名を用いた。対照には，骨格性I級叢生症例と診断された混合歯列期患者5名，永久歯列期患者5名を用いた。研究資料にはパノラマX線写真を用いた。

【方法】パノラマX線写真の透写図上で左右それぞれの眼窩下管が眼窩下縁と交わって作る線分の midpoint の左右側を結ぶ直線を水平基準線とし，その垂直二等分線を正中線とする直交座標系を設定した。上顎洞底最下点は水平基準線に直交する線が上顎洞底骨縁上の最深部と交わる点とした。歯槽骨頂交点は上顎洞底最下点の延長線が歯槽骨頂縁と交わった点とした。水平基準線から上顎洞底最下点までの直交距離を上顎洞底高径，上顎洞底最下点と歯槽骨頂交点までの直交距離を歯槽骨高径とした。統計学的分析については，混合歯列期，永久歯列期，各群での変化量を求め2群間での上顎洞底高径と歯槽骨高径のunpaired t - testを用いて行った。

【結果】1) 先欠群の上顎洞底最下点は欠如歯相当部に認められた。2) 上顎洞底高径は成長発育により増加した。3) 歯槽骨高径は永久歯列期に減少した。4) 対照群に比較して先欠群の歯槽骨高径の減少が大きかった。

【考察】欠如歯相当部で上顎洞底最下点が認められ歯槽骨高径も減少していたことから，上顎洞は先欠部に拡大して成長するのではないかと考えられた。先欠群で上顎洞底高径の成長発達が小さかったのは，上顎洞底最下点が混合歯列期において下方へ拡大していたからと考えられた。

【結論】先欠部に上顎洞が拡大していると推察されたことから先欠部に隣接する歯の移動には注意が必要である。歯の有無は上顎洞底線の垂直的位置決定に関係があると示唆された。